

## メッセージアウトライン テサロニケ人への手紙 第二3:6~15 「兄弟たちに対する戒め」

[6]「兄弟たちよ。主イエス・キリストの御名によって命じます。締めりのない歩み方をして私たちから受けた言い伝えに従わないでいる、すべての兄弟たちから離れていなさい」

パウロはここで「主イエス・キリストの御名によって命じます」と主イエス・キリストの権威に立つ使徒として戒めを与える。これは個人的な考えや単なる忠告ではない。

「締めりのない(アクトス)」とは、兵士が隊列から脱走していくの意で、パウロたちから受けた教えに従おうとせず、勝手気ままな行動をするそのような兄弟たちから離れているようにと命じられる。彼らはキリストの再臨の教えを誤解して、自分の仕事もせずに勝手気ままに行動していたのであろう。パウロはテサロニケ教会の兄弟姉妹たちが彼らの影響を受けて本来あるべき生き方からはずれてしまわないように、このように命じるのである。

[7-8]「どのように私たちを見ならうべきかは、あなたがた自身が知っているのです。あなたがたのところで、私たちは締めりのないことはしなかったし、人のパンをただで食べることもしませんでした。かえって、あなたがたのだれにも負担をかけまいとして、昼も夜も労苦しなから働き続けました」

パウロたち伝道者はテサロニケに滞在していた時、クリスチャンとして模範を示した。それはテサロニケ人たちが実際に見て、彼らとともに日々を過ごしたのでよく知っていることだった。パウロはそのことを思い起こさせる。

①締めりのないことはしなかった。

②人のパンをただで食べることもしなかった。…生活のことで他の人々に負担をかけなかった。

③あなたがたのだれにも負担をかけまいとして昼も夜も労苦しなから働いた。…パウロは天幕作りの技術を持っており(使徒18:1~3)、他の同労者もまた労苦しして昼も夜も働いた。

このようにしながら彼らは福音を伝えたのである。

[9]「それは、私たちに権利がなかったからではなく、ただ私たちを見ならうようにと、身をもってあなたがたに模範を示すためでした」

パウロはキリストによって選ばれ立てられた使徒であり、その使徒としての権威によって信者たちに生活を支えてもらう権利があった。→Iコリント9:6~7,13~14

しかし、パウロたちはあえてこの権利を用いなかった。それはテサロニケのクリスチャンたちが見ならうようにと、身をもって模範を示すためであった。

[10-11]「私たちは、あなたがたのところにいたときにも、働きたくない者は食べるなど命じました。ところが、あなたがたの中には、何も仕事をせず、おせっかいばかりして、締めりのない歩み方をしている人たちがいると聞いています」

テサロニケ滞在中、勤勉に働くことの大切さ、尊さを示したパウロたちは、また一つの戒めとして「働きたくない者は食べるな」とも命じていた。これは怠惰な者たちに対する戒めであったであろう。ところが残念なことにテサロニケ人たちの中には6節でも言われたが、「何も仕事をせず、おせっかいばかりして、締まりのない歩み方をしている人たち」がいたのである。そのことはパウロたちの耳にも入ってきていた。

[12-13]「こういう人たちには、主イエス・キリストによって、命じ、また勧めます。静かに仕事をし、自分で得たパンを食べなさい。しかしあなたがたは、たゆむことなく善を行いなさい。兄弟たちよ」

主の再臨の時はだれも知らない。それゆえそのことについていたずらに騒ぎまわり、地に足のつかないような生き方をするのではなく、いつ主が来られても心の準備ができてるように静かに落ち着いて仕事に励み、健全な信仰生活を送らなければならない。そのように神のみこころにかなった生き方、善を行っているならばよい報いがやがて与えられることになる。→ガラテヤ6:9

[14-15]「もし、この手紙に書いた私たちの指示に従わない者があれば、そのような人には、特に注意を払い、交際しないようにしなさい。彼が恥じ入るようになるためです。しかし、その人を敵とはみなさず、兄弟として戒めなさい」

「交際しないように」の目的は、「彼らが恥じ入るようになるため」つまり彼らが悔い改めて本来の姿に立ち返ることにある。決して永遠に教会からはじき出してしまいうためではない。

ここに至るまでには少なくとも3回はこのような人々に勧告がなされている。

①パウロのテサロニケ滞在中、口頭で。→10節

②第一の手紙で。→Iテサロニケ4~5章

③そしてこの第二の手紙で。

このように段階を踏んで厳しい処置がなされていくのである。決して感情的、頭ごなしではなく、またその人を敵とはみなさず、あくまでも主にある兄弟として戒めるのである。その目的は彼らを主のもとへ引き戻すことにある。

私たちも間違った教えや情報に惑わされることなく、落ち着いた生活をすることを志し、そのような中でいつ主が来られてもよいように、日々、主のみこころにかなった生き方、たゆむことなく善を行う生き方に励む者になりたい。